

特定非営利活動法人 わっか
2020年度 月次報告書

2020年

4月

だれもがまるごと
受けとめられる
社会をつくる



NPO 法人 わっか

だれもが、まるごと受けとめられる社会

わっかは、だれもが、まるごと受けとめられる社会を目指して活動を行う団体です。

子どもを取り巻く環境について

子どもたちは「思うがまま」に過ごす時間や、まるごと受けとめられる経験が少なくなっています。いまの子どもたちは、自分では変えることができない社会環境や大人の意識の変化により「思うがまま」に過ごす時間や、まるごと受けとめられる経験が少なくなっています。

大人の価値観による評価、他者との比較や数字で表せる結果で、子どもの存在を条件付きで認める場ばかりになり、さらには、地域社会においても、その子のまるごとを受けとめてくれる存在も少なくなっています。また、学校、学習塾、習い事、スポーツクラブで多忙な毎日を送り仲間も時間も空間もなくなりつつあります。私たちは、まるごと受けとめられる場づくりをしたいという思いで居場所づくり事業 や 出会いと学びを育む事業 などを行っています。

事業内容

1

居場所づくり事業

月ようわっか 日ようわっか 平日わっか
さかっこクラブ

2

出会いと学びを育む事業

寺子屋わっか、こどもの夢中全力サポート事業（かめラボ）、講演会
若者の生活・就労支援

3

その他

宅食

月ようわっか
毎週月よう日
15:30~20:00

のべ人数

こども **30** 名 (**23** 名) 大人 **7** 名 (**0** 名)

※ () 内の人数はご飯を食べた方 (もち帰りも含む)

毎週月よう日の放課後に必ずひらかれる場です。参加費無料・申込不要。カリキュラムやプログラムは一切なしで「ルールがない」がルールです。子どものみちくさできる場所、子どものたまり場として場をひらいています。

6日 こども **21** 名 (**14** 名) 大人 **4** 名 (**0** 名)

メニュー：ごはん、豆腐とえのきとワカメの味噌汁、ちくわの磯辺揚げ、かぼちゃ、さつまいもの天ぷら
ひじきと昆布のきんぴら

13日 こども **9** 名 (**9** 名) 大人 **3** 名 (**0** 名)

メニュー：ごはん、豆腐とわかめの味噌汁、シュウマイ、大豆とひじきの煮物

※20日以降は、新型コロナ対策ウイルス対策により、休止。

▼番外編 月曜日の人数が多すぎて、ゆっくりできないという声に reacting、金曜日もひっそりと開けるようになりました (17:30 ~ 20:00)

3日 こども **7** 名 大人 **1** 名、10日 こども **7** 名 大人 **2** 名、17日 こども **3** 名 大人 **1** 名



nobi と asuka アメブロ「月ようわっか」

活動を自粛する中でうごくことーわっかのごはんからー

「コロナ禍」の世間の騒ぎが

繋がっている若者にとって 社会への疑心が他人へとなり

すれ違うヒト、お店の販売員、すべてにおいての疑心が不安へとつながり

扉がさらに重く厚くなっていく

市民活動を自粛していく中、こども食堂も一旦お休み

そんな中でもできること、私にできること、私が彼らにできたこと

ごはんを作ること。それは、お弁当を届けることにつながった

お弁当を届けた時、玄関の扉が開く

それは、彼らの心の扉が開くかのように緊張する瞬間である

生きづらさを抱える彼らにとって、ごはんを届ける事が
更なる生きづらさを抱える事になるのではないかと
詰めるおかずが、枷を詰めているように感じ悩みながらも

重く厚い向こうに、微かに、確かにいのちの鼓動を感じるから

わたしはごはんをつくり続ける



日ようわっか
10:00~15:00

こども 6名 大人 3名 メニュー：カレー

日ようわっかを開ける日までに常連さんたちで、LINE のやりとりをしました。

こんにちは。私も行きたい気持ちありありなのですが、今はぐっと我慢します。平和な日常が帰ってきた時のわっかカレーは1段と美味しく感じられるだろうなあ。みんな頑張りましょうね。

わが家もこの時期なので家にいることにします。ほんとに、また気にせず遊べる日を楽しみにしています!! 皆さん、日々のストレスやお疲れが出ませんよう。

わっかにくることはできなくても、こうやってやりとりができるのは、いいなって思いました。また、来たいなと思ったときは、気にせず来ることのできる日々がくることを願っています。

さて、そんな時期ではありましたが、いつも通り古民家をあけると来てくれる人がいました。この日は、保育園のおなじクラスの3人と、大学生、小学校6年生の子といつもより幅のある年齢の子ども（若者）がいました。いつもはだいたい小学校中学年までがメインなのですが。だから、この常連の3人にとってはいつもより、年の離れた子どもたちと一緒に過ごしているので、心なしか遊びが大胆になっていました。

毎月、開けているとそういう違いも見られておもしろいです。



寺子屋わっか

おやすみ

学校一斉休校にともなう臨時の居場所づくりと宅配

① 古民家開放およびシェルターの居場所づくり

これまでわっかの活動をおこなう中で、出会って関係を繋いできた子ども・若者に限定して開催していることを連絡し、集団規模を小さくして実施しました。

内容)

■ 毎週月・水・金

家にいることがリスクになりうる子どもや、居場所のない若者たちが、古民家でスタッフともにゆっくりと過しました。

■ 毎週火・木

緊急性や必要性の高い子ども若者に食事を提供したり、相談を受けていました。

② 宅配・見守り

自宅で一人もしくは友達と一緒に子どもだけで過ごす家庭へ、平日5日間の間、お弁当を宅配しました。宅配と同時に、保護者へ安否確認をメッセージすることで、保護者が安心して就労できるサポートをしました。

また、バイトができなくなり収入が途絶えた大学生、普段から関わっている若者にお弁当を毎日届ける、宅食活動をしました。



2018年4月より米原市放課後児童クラブを 受託しています。

私達が、子どもと向き合うときに大切にしていること。それは、子どもと、一人の人間として向き合うこと。だから、変に子ども扱いしないし、猫かわいがりもしない。特に、のびとあすかは、子ども達に率直に思いを伝え、回りくどく話したり、説教じみた言い方したりはしない。今、ボク達があなたと向かって感じることをそのまま伝える。子どもに好かれようとも思っていない。彼らが成長し、幸せに一時一時を過ごしてくれたら、それでいいと思っている。そりゃあ、もちろん嫌われるよりは好かれたいと思ってもいるが。

あすかにいたっては、子どものことがそもそも嫌いだ。大の苦手で、できるなら接してない方がいいくらいらしい。のびは、そうでもないが、本当に心から嫌われてもいいから、彼らに寄り添いたいと思えるようになってから、子どもとの接し方は大きく変わった。こちらも着飾らず、素直に彼らとユニークな時間を過ごすことができるようになった。その根幹は、一人の人間同士として子どもと向き合うという姿勢で、それは自然に生まれてきた。



佐藤さんは、だいのすけの用務員をしてくれるのに

日本の中心に行ってしまった人です。

佐藤真紀さんのプロフィール

現場から現代社会を思考する/ソーシャルワーカー(精神保健福祉士|社会福祉士)/非営利法人の理事/大学院生/JYC フォーラム/地域:東京,岐阜,滋賀/
領域:地方自治,若者,子ども,虐待,ひきこもり,生活困窮,学校,女性,LGBTQ/

「だいのすけとわかっ〜居場所は不要不急なのか」

滋賀県でも緊急事態宣言が解除され、学校再開の道筋も付けられ始めている。この COVID-19 の騒動が始まり、一気に「不要不急」というワードがトレンドとして表出した。わかっを端緒とした全国各地の居場所機能を備えた団体では、この間は休止処置がとられたり、最大限の防疫処置をとりながら継続したりと、それぞれの対応がなされてきた。わかっでは、後者の対応を取りながら活動を継続してきたが、今回はあらためて「不要不急

と居場所」を再考してみたい。

ただし、この話はあくまで滋賀県米原市における 1 事例であり、各地の実践にそのまま当てはめるのはあまりにも乱暴であることは記しておきたい。各地で生活をする若者を語る際には、いわゆる「描かれやすいイメージ」や、「わかりやすいこと」に視点が移りがちだ。しかしながら、そうしたものは私たちの見方を狭めるだけでなく、実践の奥行を狭くしていくことに外ならない。だからといって、わかっの個別性に過度にこだわりすぎると、一般化した知見とは言えなくなる。そうした前提の上に立ちながら、多様な実践のひとつとして、わかっの活動を見守っていただければと思う。

さて、「居場所」ということばが使われるときに、それは時間的であるのか、空間的なものであるのか、それとも情緒的関係性であるのかといった一つの区分けはできますが、実態としてそれらは複合的に絡み合ったものであり、なにかひとつであるとは言いきれません。また、現在までに「居場所」の定義自体も定まっておらず、各団体の実践においてそれぞれの解釈で使用されてきた。

わかっは日中の居場所を担当している共同代表のだいのすけからことばを借りると「なんでもない場所」としておこなってきた。なんでもない場所を換言すると、日常生活の中の一部であると捉えることができます。それを表す端的なものとして、だいのすけが日々書いている note を AI を活用して分析をしたところ、「編みもの」、「ボク」、「退屈」、「子ども」といったキーワードが頻出している。つまり「居場所」を行っているのではなく、日常生活をしているとも解釈が可能なのではないだろうか。生活の場は不要不急もなく、日々の日常であり、必須のものといえる。

こうした居場所という言葉すら超えた生活の場は、子どもたちも自然体で過ごすことができおり、楽しいことだけでなく、ふとした時に日常のさまざまな悩みがこぼれだします。ネットが発展・浸透してきたとはいえ、子ども自身が声を上げることが困難(そもそもが言語化というプロセスが必要)な社会構造の中で、わかっのありかたはアドボケイトのきっかけにもなっている。また、わかっに集うのは子どもだけでなく、若者や大人もかかわっているが、ポジショニングに関わらずそれぞれが社会と自分との間に生じる問題に対して状況に向き合っている「当事者」といえる。ただ、こうした枠組みは、どうしてもわかっに関わる個々人の力量による不安定な支援(わかっに限らずですが)になりがちであり、誰にでも享受可能な社会保障としてのありかたにも目を向けていかねばならないだろう。ただし、そうした社会システムとしての保障も、日々の積み重ねの中で生まれるものであるが、質的な物語だけでは制度としては動かず、量的なエビデンスも同時に積み上げていく必要があるが、これらは現場だけでなく、周辺の研究者や専門職を巻き込んで行っていくものでもあり、今後のわかっも「実践の積み上げ方法」として模索していく必要がある。

ともあれ、不要不急の議論の中には、日常生活を削ぎ落して皆が我慢しなければならぬという風潮があるが、それが生活保障の内容やレベルをあげるという方向性ならば望ましいが、自由な生き方を制限するようならば、危険視する部分はあるだろう。その意味で、緊急事態宣言中も開け続けるという選択をしたわかっのありかたは、一石を投じるものであった。

みなさまからの
寄付など

わっかが、古民家を『参加費無料』で開放を支えるのは、

みなさんのご寄付やご助成のおかげです。

2020年4月にいただいたご寄付、ご支援とマンスリーサポーターの方
2020年度の助成団体さまのご紹介させていただきます。

4月にいただいた物品・資金でのご寄付（敬称略）<>内の方から頂きました

マスク、資金

< 匿名 >

お菓子

< 青岸寺 >

古本

< ご近所の方 >

マンスリーサポーター（定額寄付会員） 14名（敬称略）

大溪 麻紀子

福地 真路

後藤 基志

マコトヤ

佐藤 真紀

佐藤 桃子

廣部 奈緒美

前田 諭

藤澤 彰祐

石田 智子

佐藤 笑代

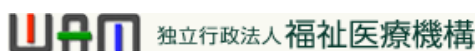
氏名の掲載をご許可いただいた方のみ掲載しております

2020年度 助成団体（敬称略）2020.5.30現在

米原市役所



独立行政法人 福祉医療機構



米原市社会福祉協議会



全国食支援活動協力会



SOCIAL SHIP2019

真如苑

寄付者の声

行ける日がなかなか作れないのですが、ひとまずお金で応援させてください。

わっかが、今まで通り、みんなの安心できる場所でありますように。



団体名	特定非営利活動法人 わっか
住所	〒521-0012 滋賀県米原市米原 178 番地 5
電話	070-1803-1059 (代表)
メール	wacca235@gmail.com

ホームページ



FB ページ



のびとあすかの思いについて知りたい方は、Ameblo へ



note では、だいのすけが、わっかですごく日々から感じたことなどをかいています。



You Tube では、わっかの様子を動画で見いただけます。

